

黄色い花の咲く丘

山本五十六の謎

支刈
誠也

黄色い花の咲く丘・もくじ

黄色い花の咲く丘・もくじ

プロローグ ————— 7

第一章 オーストラリア ゴールド・コースト ————— 27

第二章 パプア ニューギニア・マダン ————— 54

第三章 ブーゲンビル島 ————— 67

第四章 西鎌倉 ————— 78

第五章 長岡 ————— 105

第六章 道玄坂 ————— 129

第七章 道修町 ————— 140

第八章 水上小屋 ————— 152

第九章 タリスマン ————— 167

第十章 モノール島 ————— 184

第十一章 黄色い花の丘 ————— 231

第十二章 千代田区三年町 ————— 243

エピローグ ————— 255

●スタッフ●

編集

佐田 満

装丁・カット

yuki

画像処理

デザインオフィスはな

コピー

宇田川森和

プロローグ

昭和十八年五月。

二人の青年が、五月晴れの空を見ながらひなたぼっこをしていた。長岡中学の裏手を流れる栖吉川すよしがわは、雪解け水をたたえてゆつくりと流れていた。越後平野と関東平野を隔てている越後山脈を水源とするこの川は、長岡市の東を北上し、信濃川に合流する一級河川だ。

川幅はそれほど広くなく、夏の盛りには、子供たちがウグイやハヤなどを手づかみできるほどの水位になるのだが、河床が周囲より高い天井川であるため、その土手の上に立つと、信濃川の沖積地にできた長岡市の東南半分を望むことができる。

「潤一。おまえは、海兵（海軍兵学校）を受けるんだろ」

ぼつりと、十郎が寝ころんでいた潤一に言った。

「うん」

上体を起こし、向き直った潤一の目に強い光のようなものが宿っていた。それに気づいた十郎は、

「まだあのことが頭の片隅に重くのしかかっているのだ。」

と思った。

「恩賜の短剣組を二人も兄に持つんだから、おまえが海兵を目指すのは、あたり前と言え、あたり前なんだけど」

十郎が、潤一の目から視線をそらしながら言った。

潤一の長兄幸一は、海兵七〇期卒の海軍少尉、次兄の昭一は、七一期卒の少尉候補だ。二人とも卒業成績優秀者として天皇から短剣を賜っている。

「もしも、あのときのことか頭にあるんだったら、止めたほうがいいと思うんだけど」

「あのときのこと？ ……ああ、あれか。あれは、あいつが長中入塾に落ちたときに、きっぱりと忘れた」
「そうか、それならいい」

潤一の目の奥に見た強い光のようなものは決意の表

れだった。十郎は、長年の胸のつかえが、すつとおりるのを感じた。

——あれにこだわっていたのは、おれのほうかもしれない。潤一はおれにとつての希望の星だ。あれで傷ついたのは、潤一ではなく、おれ自身だったんだ。

支那事変（日中戦争）が三年目に入り、長期化を示し始めていた昭和十四年、海軍省の肝煎りで、長岡市内とその周辺の小学校から男子一名ずつが選ばれ、戦意高揚を目的とした海洋少年団長岡支部が結成されることになった。

それを知った同級生は、誰もが、「江藤くんが選ばれるに違いない」「潤一にきまりだ」と思った。それは、潤一が生徒会長をしていたからなのはもちろん、海兵生徒を二人も兄に持っていたからだ。夏には真っ白な海軍将校第二種軍装姿で、冬にはネーヴィーブルーの第一種軍装に身を包んで、さつそうと帰省する海兵生徒は、みんなの憧れの的だった。その頃の子供は、誰もが軍国少年、少女だった。

同級生の思いは、やがて、「潤一に決まったそうだ」

という、ありもしない既成事実を作りだし、「担任の茨木イツ先生が、『結団式には、山本（五十六）次官が海軍大臣の代理として臨席されるらしい。これで、江藤くんは、兄弟そろって坂之上小学校の代表として、五十六さんと一緒に写真に納まることになる』と言った」という、根も葉もない噂を生んだ。

坂之上小学校の校長室には、昭和十年、日本の首席代表として出席したロンドン海軍軍縮予備会議の直後に帰岡した山本五十六中将（当時）が、小学校で講演したときの記念写真が掲げられていた。その左端に、潤一の長兄幸一が校旗を手に、まぶしそうな顔をして納まっているのを同級生の誰かが知ったのだ。

そんな噂を同級生から聞かされた潤一は、「選ばれるのはおれではない。だいいち、茨木先生が決まってもないことを口にしたす訳がないだろ」と照れ隠しで言っただけのもの、

——生徒会長のおれが選ばれるのは、当然。結団式には五十六さんが海軍大臣代理として臨席されるのか。おれもこれで幸一兄さんと肩をならべることができる。

などと内心密かに思っていた。

ところが、蓋を開けてみたら、選ばれたのは、自分ではなく、市の有力者の息子だった。

潤一は、その息子が水兵の出で立ちをして手旗信号の練習をしているのを見たり、「軍艦見学にでかけた」などという話を聞くたびに、腸が煮えくりかえる思いをしていたが、「おれではない」と言っていた手前、平静さを装っていた。だが、町家の子に生まれ、人情の機微を察するのに長けていた十郎は、それまでと変わらず明るく振舞っている潤一のみせかけの姿にだまされることはなかった。怒りが心の底に淀み、こびりついているのを見抜いていた。

「潤一。そんなに怒るなよ」

「何のことだ、おれは怒ってなんかいないよ」

十郎が何を言っているのか分かってはいたが、潤一はとぼけた。

「おれは勉強はできないけど、この目は節穴ではない。おまえが海洋少年団のことで怒っているのはお見通しだ。あんなもの、戦争ごっこに毛が生えたみないなもの

んだ。水兵の真似をして旗なんか振っているだけの戦争ごっこだ」

「戦争ごっこ？」

「そうだ。戦争ごっこだよ。あんなもの、もう忘れろ。おまえは頭がいいんだから、兄さんたちのように海兵に入って本物の海軍将校になればいい。そうすればあいつらを見返してやることになる」

「そうか。戦争ごっこか。……海軍将校になって見返す、か。それもいいな」

潤一は、何かが腹の底に、すつと納まるのを感じた。「海兵に入ってあいつらをギャフンと言わせるんだ」

十郎は、それが、あたかも自分のことであるかのように入力を入れて断言した。

——やっぱり十郎は優しい。あのとき以来、おれのことを心配し続けていたんだ。

「十郎。ありがとうよ」

「ありがとうって何だ。おれは何にもしちゃいないよ」
「とにかくありがとう。今のおれは、駆逐艦に乗って

いる幸一兄の後を追うか、飛行機乗りになった昭一兄の後を追うか決めかねているだけだ。侍の子が侍になる。前髪をおとす覚悟は、とうの昔にできている」

「前髪をおとす覚悟か。侍の子はいいよな。おまえは頭が良いから海兵なんかお茶の子さいさいだし。それにくらべ、おれは町屋の子のうえに、頭が人一倍悪いときている。行くところがないんだ」

中学生になっても近所の子供を集めてチャンバラごっこに興じていた潤一は、予習も復習もしないにもかかわらず、成績はつねに学年でダントツ。そのうえ、スポーツは万能だった。

しかし、十郎は違った。学業は後ろから数えたほうが早く、スポーツはからつきしダメだった。潤一の家は士族、十郎の家は平民という違いもあった。違いはそれだけではなかった。小学校に入ったときから今に至るまで、潤一は学年一のノッポだし、十郎は、ずっと学年一のチビだった。

そんな二人の気があったのは、一つには、潤一の母、千恵と、十郎の母、ヨシが長岡女子高等学校以来の友

で、お互いの家庭をひんばんに行き来していたことがある。母親たちの延々と続く世間話の間、誕生日が三日しか違わない二人は、双子の兄弟のように遊んでいた。

潤一が理性派のデジタル人間なのに対し、十郎は情緒派のアナログ人間だということもある。真反対の性格を持った二人が磁石のN極とS極が惹かれるように互いに惹かれあつたのだ。

ともに正義感が強かつたことも理由の一つだ。

二人が中学三年のときだった。

昭和の始め頃、東北を中心にした小学校教師の間で、地域や生活に根ざした養育を進める運動がもりあがつた。やがて、それは、綴方と詩を表現の場とした生活綴方教育運動となり全国に広まり、長岡にも全日本綴方倶楽部長岡支部ができたが、戦時色が濃くなるにつれ、その運動は非国民的教育との弾劾を受けるようになっていった。

昭和十六年、北海道の教師五十人を治安維持法違反で逮捕することから始まった特高（特別高等警察）の

手による弾劾は、やがて長岡にも及び、茨木先生が逮捕されるといふ事件に発展した。

「学校教育は、読み書きが基本」と考えていた先生は、夏休みの宿題だった絵日記の延長として、生徒に綴方を書くことを勧めただけのことで、生徒に偏った価値観や考え方を植え込む可能性がある運動に賛同していた訳ではなかった。特高が左翼思想と決めつけた運動そのものとは、一切、拘わりを持っていなかった。

その茨木先生の一番のお気に入りが十郎だった。同級生から、「のろま」、「グズ」とののしられることが多かった十郎の救いは、陰日なたなくかばってくれる潤一と、自分が書いた綴方を誉めてくれる茨木先生の優しい言葉だった。

「茨木先生逮捕」を知った十郎は、のろまでグズな飯面をなぐり捨てて、一人でそれに立ち向かおうとした。それを知った潤一も立ち上がった。十郎とは違い、現実をよく見て立ち上がった。

「十郎、中学生のおまえとおれが、特高に掛け合っ

も相手にされない。それどころか、臭い飯を食わされるのが落ちだ。ここは考えどころだぜ」

「そうだな。市の有力者にでも掛け合うか。しかし、例の海洋少年団のこともある。無理だな。五十六さんに頼もうか」

「おまえは馬鹿か。聯合艦隊長官にこんなことを頼めるか」

「昔、五十六さんは、長中での講演で、『私は、不肖ながら諸君の先輩として母校に報いるべき任務を負っている』って言ったらしい。坂之上も五十六さんの母校だぜ」

「おまえは、いくつになっても夢を見るんだな。とにかく、市役所と教育委員会に掛け合っつて、特高に話してくれるよう頼もう」

二人は放課後を利用して市長を訪ねた。三日ほど門前払いが続いたある日、偶然、市役所からでてくる市長にでくわした。二人は、必死になって特高への口利きを頼んだが、市長は、

「特高に口を利いてくれだど。何を寝言を言っている

か。だめだ。だめ！」

の一点張りだった。それは教育委員長も同じだった。その年の一月にできた大政翼賛会長岡支部も訪ねたが、支部長の答えも同じだった。誰もが特高から非国民と疑われるのを恐れているのだ。

——「義を見てせざるは勇なきなり」だろ。

と、二人は、長いものに巻かれて恥ずかしがる様子もない大人たちの厚顔さにあきれかえるばかりだった。ところが、二週間ほどして、二人がほとほと疲れはてた頃、茨木先生は容疑が晴れ、坂之上小学校に戻ってきた。

ノッポとチビ、俊敏で器用。のろまでグズ。そんな二人を見て同級の者がうまいこと言った。「金魚とウンコ」と。ウンコは金魚の行くところ、どこまでもつきまとうのだから、言い得て妙だった。

「潤一。おれは、予科練（海軍飛行予科練習生）に行こうと思っているんだ。進学もしないで、うろろうしているうちに赤紙がきて、陸軍にとられ、鉄砲を担い

で満州の荒野を行軍なんてことになったら、紙切れ一枚になって帰ってきた二番目の兄貴の仇も討てないかな」

十郎の次兄次郎は、半年ほど前、ガダルカナルで戦死し、シベリア寒気団が年末に降った根雪の上に、十センチほどの新雪をもたらした二月のある日、白布で包まれた一尺四方ほどの木箱に納められ名誉の帰国をした。

「靖国の母」などというまやかしの言葉に、悲しみの涙を抑えていた十郎の母ヨシは、それが届けられた夜、一人でこっそりそれを手にとり、白布の結び目を手をかけた。

寒さで手がかじかんだのか、それともヨシの本能が息子の変わり果てた姿を見るのをためらわせたのか、結び目を解くのに時間がかかった。蓋を開け、雪明りを頼りにのぞいた箱の中には何もなかった。一枚の紙切れが、他人ごとを語るように、そらざらしく置かれているだけだった。

「陸軍上等兵 徳田次郎之霊」

ヨシはその紙切れを手に声を押し殺して嗚咽した。

同じ夜、寢床に入っていた十郎は兄の死にざまを空想していた。

——次郎兄ちゃんは、最後に帰ってきたとき、「どこか知らないけど南に行くらしい。夏服を支給されたから」って言っていた。兄ちゃんは南洋で死んだんだ。

十郎にとつて、南洋とは『冒険ダン吉』の世界でしかありえない。

——ダン吉のようにトラやライオンと戦いながら競争をしていたのかな。真つ黒な原住民は日本軍の味方をしてくれたんだらうか？ おれと違って野球でも徒競走でも何でも一番だった兄ちゃんが、どうして死んだらう。油断していて敵の弾にあったんだらうか。それとも、椰子の木ごと爆弾で吹き飛ばされたんだらうか。最後に、「天皇陛下、万歳」って叫んだのかな？ 兄ちゃんの霊が戻ってきて話をしてくれたらいいな。

気がつくと、仏間のほうから、かすかな物音が聞こえてくる。

——次郎兄ちゃんが戻ってきたんだ。

十郎は、脇で寝ている姉たちに気づかれぬように、そつと掛け布団を持ちあげ、起きあがった。忍び足で居間を抜け、仏間との仕切りのふすまを一寸ほど開け、中をのぞいた。白っぽい人影がある。

——やっぱり兄ちゃんだ。

と思つて、目を凝らすと、それは寝巻き姿の母だった。

——ちえつ。母ちゃんか。

ヨシが木箱を開け、紙切れを取りだした。目を凝らして見ていた十郎の耳に、ヨシの忍び泣く声が聞こえてきた。心優しい十郎は、母に慰めの言葉をかけようと、自分が盗み見をしているの忘れ、ふすまを開け、母の前に飛びだした。その気配に気づいたヨシは、素早く寝巻きの袖で涙をふき取り、背筋をぴんと伸ばした。その姿を見た十郎の口から出たのは、慰めの言葉ではなかつた。軍国少年のそれだった。

「母ちゃん。今、泣いてただろ。次郎兄ちゃんは名譽の戦死なんだよ。泣いちゃだめじゃないか」

「馬鹿。人間はね、木の股から生まれるんじゃないん

だよ。陸軍大将の子だって、町家の子だってみんな母親がお腹を痛めて産んだ。どこの世に自分が腹を痛めた子が死んで泣かない母親がいるもんか」

「母ちゃん、おれが軍人になって仇討ちをしてやるから」

ヨシは、十郎に赤紙がくる日が遠くないことを知っていた。「もう戦争はこりこり。おまえも仇討ちなんか考えるんじゃないよ」という言葉を飲み込み、無言で紙切れを戻し、小箱を白布で包み直したときには、もう「靖国の母」の顔に戻っていた。

「十郎、ちょっと待て。お前は職業軍人になりたいのか、それとも飛行機乗りになりたいのか、どっちなんだ」

ノツポの潤一は白い顔をいくらか紅潮させた。

「職業軍人になりたいんだけど、おれの成績じゃ海兵は無理だろ。予科練の甲種は、中学四年の一学期修了者による志願制だから、成績が悪いおれだつて入れてくれるだろうし。五十六さんがいた霞ヶ浦航空隊に願

書をだそうと思っているんだ」

「十郎。さっきも言ったように、おれが海兵を目指すのは、おれが武家の出だからだ。侍の子が侍になるだけのことなんだ。『平民の子が侍の真似をする』などという野暮を言うつもりはないけど、おまえは宿屋の息子だろ、海兵に入れないからって何も飛行機乗りになることはないと思うぜ」

「兵学校を目指しているおまえが、非国民みたいなことを言うじゃないか。おれだつておまえと同じように、『大きくなったら大将になりたい』、と言いながら育ってきた。おまえは、『大本営発表を聞いたたびに、早く軍人になって手柄を立てたくなる』って言っていただろ。その思いは、おれだつて同じだぜ。兄貴の仇も討ちたいじゃ」

「おまえは何にも分かつちやいないんだな。『腹が減っては戦ができぬ』って言うだろ。どれだけ優秀な軍人だつて飯を食わなきゃ戦えないんだ。軍人が食う米を作っている百姓だつて立派にお国のために戦っているんだ。鉄砲だつてそうだ。誰かが作らなくては、軍人

は戦争もできない。軍艦だって、飛行機だって、みんな民間人が作っているんだ。戦争というのは、軍人だけがするものじゃあない。銃後の守り、これがあってはじめて、軍人は戦えるんだ。宿屋だってそうだ。宿屋がなければ軍人は視察旅行もできない」

「……」

潤一の言う理屈に十郎は反論ができない。

「おまえは小学生の頃、逆あがりもできなかっただろ。相撲だってクラスの女の子に負けていたじゃないか。おまえの運動神経では、飛行機乗りになるのは無理だ。昭一兄が言っていたけど、戦闘機で半径百米ほどの急旋回をすると、血液が身体の外側に集まって、一瞬、気を失うんだそうだ。おまえには飛行機を乗りこなす体力はない。それどころか、徴兵検査で丁種（兵役不適格）にされるのが落ちだ。おい、あれを見ろ」

栖吉川の川面すれすれに飛んでいる燕を指差しながら潤一が言葉が続けた。

「これも、昭一兄が言っていたことだけど、燕のあの飛び方、真っ直ぐに飛んでいたと思っただら次の瞬間、

上下左右、自在に方向を変えることができるあの飛び方が、戦闘機乗りとしての究極技なんだそうだ」

「なるほど、あのすばしっこさか。おれには無理かもしれんな。……おい、燕って渡り鳥だよな。ひよつとしたら、あの燕は五十六さんがいるトラック島辺りから渡ってきたのかもしれない。一カ月ほど前には、五十六さんの前で、あの軽やかな飛行力を披露していたのかもしれないぜ。『五十六さん、これが戦闘機乗りの極意ですよ』とか何とか言いながらさあ」

十郎はあつけらんかんに笑った。

「おまえの空想力には負けるよ。軍人というより文人向きだね」

十郎のあどけない笑顔に苦笑いした潤一は、いつまでも子供心を失わない十郎がうらやましくもあった。

「燕が伝書鳩だったらいいな。秋にトラック島に帰るとき、『五十六閣下、長岡中学後輩の徳田十郎です。飛行機乗りになって、お国のために戦いたいのは山々ですが、逆あがりもできない私には無理なことのようにです。その代わりに、閣下が心置きなく戦えるように、

銃後をしつかり守ります』なんていう手紙を託せるじやないか」

「まるで童話の世界だ。やっぱり、おまえは軍人向きじゃないよ。小学校の先生にでもなつたらどうだ。兄さんの仇はおれが討つてやるから」

と言いながら立ちあがった潤一に手を取られ、十郎も立ちあがった。

「先生か。ふーん。おれ向きかもしれんな。茨木先生みたいな優しい先生にか。それもいいな。ならば師範学校にでも挑戦してみるか。心を入れ替えて勉強すれば受かるかもしれないし」

「両膝と尻の両側に継ぎがあたつたズボンについた枯れ草を掃き落としながら十郎が答えた。脇に立つ潤一の学生服も継ぎはぎだらけだ。

「質実剛健」、「常在戦場」をモットーにしていた長岡中学の学風は、一口で言えばバンカラだ。足駄を履き、弊衣破帽を自慢にしている生徒が大半だったが、二人の弊衣破帽には、そんな気取りとは別な事情があった。潤一は、男四人兄弟の三番目、十郎は、男四人、

女六人兄弟の十番目であり、ともに、帽子、学生服、カバンは、すべて兄からのお下がりのなのだ。

「そうだよ、それがいいぜ。おまえの成績が悪いのは頭が悪いからじゃない。勉強のコツは集中力なのに、おまえは、あちこち脇見をして空想の世界に閉じこめるからだ。新潟師範の試験まで、まだ十カ月ある。今から準備を始めても遅くない。おまえがその気なら勉強ぐらいおれが教えてやるよ」

潤一は十郎の肩をポンと叩いた。

二人は、校門をでたところを左に曲がり、大通りに突き当たつたところで左右に分かれた。駅前旅館「とくだ荘」の息子である十郎は、長岡駅を目指し右へ、潤一は、父が教鞭を取っている長岡高専（現、新潟大学工学部）の官舎がある四郎丸本町の方向へ、左に曲がった。

——遅くなつたな。三時時には間にあわなかったが、四時時には間にあうだろう。

二十分ほど早足で歩き、大通りを官舎の方向へ曲が

ろうとした潤一は、角のパン屋を覗き、壁にかかっている柱時計で時間を確認した。

——四時五分前だ。間にあった。

パン屋の角から五軒ほど先のところにある官舎は、現代の公務員官舎とは違い、武家屋敷風に建てられた建坪百坪ほどの門つきの立派な邸だ。

門をくぐり、「ガラガラッ」と、大きな音をさせてガラス戸を引いた潤一は、

「お母さん、ただいま」

と、左手奥にある台所にいるはずの母、千恵に向かって大声で帰宅を告げた。

「ああ、潤一かい。お帰りなさい」

潤一が期待していたとおり母は台所で夕食の支度をしている。

——しめしめ、今のうちに。

カバンを玄関の上がりがまちに置き、すぐ左手にある洋間のドアを押し開けると、二階から小学六年生の弟恵一が降りてきた。

「今日も、やってみる？」

と、目で聞く恵一に、無言で、

「うん」

とうなずいた潤一は、恵一の背を押しながらドアをそっと閉めた。

洋式茶筆筒の上には、四角い木箱に入ったラジオが母が編んだ刺繍の上に、あたかも江藤家の家宝であるかのように置かれている。

それは、自分たちが勝手に触ることを許されていない貴重品だったが、海軍少尉と少尉候補生を兄に持つ潤一と恵一は、軍艦マーチに続いて報じられる大本営発表を聞くたびに覚える血肉湧きあがるような感動の魅力に負け、一年ほど前から親に隠れて聴き始めていた。

いつもどおり、恵一がドアの脇に位置をとり、母の見張り役に立った。母が洋間に向かってくるような気配がしたら、すぐにラジオを消せるように、という子供の知恵だ。盗み聴きをし始めて一カ月ほど経ったある日、もう少して母に見つかるといふ苦い経験をした後、潤一が考えたものだ。

その日も、潤一の帰宅の挨拶に、台所から母の声が返ってきた。そのやりとりを聞いた恵一が二階から降りてきて、二人は、洋間に忍び込んだ。ここまではいつもと同じだったが、その日にかぎって、潤一がラジオのスイッチを入れたとたん、母が洋間のドアを開けた。勝手口に配達物を届けにきた八百屋の御用聞きに、洋間に備えつけのタバコ盆に入っているタバコをご馳走しようとして洋間に入ってきたのだ。

「あら、おまえたちこんなところで何をしているの？」
といぶかる母に、ドアノブが回る音を聴いて、とっさにラジオのスイッチを切っていた潤一が、
「恵一がね、『トラック島ってどこにあるの？』って聞いたんで、この地球儀で教えてやっていったのさ」
と答えて、ことなきを得た。

恵一が見張りの位置についたのを見て、潤一がラジオのスイッチを入れた。

「プツン」

真空管が温もるまで時間がかかる。待ちきれないよ

うに恵一が、声を殺して言った。

「潤一兄さん、今日こそ軍艦マーチが聞けるといいね。このところ大した海戦がないと見えて、二日に一度も聞けないから」

「しっ、静かにしろ」

「昨日なんかさ、やっと聞けたと思ったら『抜刀隊』だったしさ」

大本営発表には、「われ官軍は、わが敵は」という抜刀隊のメロディーに続く陸軍報道部によるものと、軍艦マーチに続く海軍のものがあつたが、大の海軍ファンの二人は、陸軍のものにはまったく興味がな

い。「うるせーな。おまえは見張りなんだから減らず口を叩かずには耳をそばだてていろ」

二人がラジオに近づくことができるのは、学校から帰ってきてから父が帰ってくるまでの間で、母が台所で夕食の準備をしているとき、三時から五時の間しかなかった。大本営発表は、決まった曜日、決まった時間にあるものではなかったので、親に見つかるところまでどく叱られるという危険を犯す割には、得るものは

多くなかったが、秘密の行為をしていることそのものが楽しいこともあり、二人は日課のごとく繰り返していた。

その日の二人は幸運だった。真空管が温まるのを待っていたように軍艦マーチが流れてきた。しかし、その音は小さく、いつものような軽快さに欠けていた。

——調子が悪いのかな？

潤一が、ラジオを、「コン」と一叩きすると、いつもの戦果を誇るような声高なアナウンスではなく、厳粛で物静かな感じのアナウンスが始まった。

「聯合艦隊司令長官海軍大将山本五十六は、本年四月、前線にて全般作戦指導中敵と交戦、飛行機上にて壮烈な戦死を遂げたり。後任には海軍大将古賀峰一親補せられ、既に聯合艦隊の指揮を執りつつあり……」

「えっ?!」

言葉を失った潤一に、恵一が聞いた。

「兄さん、いまのは『五十六さんが戦死』って言ったの?」

「そうだ。そのとおりだ。恵一、こりゃ大変なことに

なった」

「やっぱりそうか。死んだんだ。兄さん、戦争はどうなるの。日本は負けるの」

「馬鹿。日本が負けるはずがないだろ。後任の古賀大将が五十六さんの仇を討ってくれるさ」

と、言いながら潤一は、数カ月前に感じたある不信を思いだしていた。

「そうだね、兄さん。皇軍は向かうところ敵なしなんだから」

「……」

潤一は、ある「不信感」に気を奪われていた。それに気がつかない恵一が言葉を続けた。

「兄さん、お母さんに知らせてあげようか」

「……えっ? お母さん? おまえは本当に馬鹿だな。こっそりラジオを聞いていたのがばれるじゃないか。どうせ明日になれば新聞かなんかで、みんなが知るんだ。一晩、知らん振りをするしかない」

「でも、大事件だから」

と、口を尖らす恵一に、

「恵一、いいか、口が裂けても喋るなよ」

と、念を押して、潤一はスイッチを切った。

玄関に置きっぱなしにしていたカバンを取った潤一が二階の部屋に戻ると、「大事件」と言った恵一は、その言葉を忘れたかのように、腹ばいになって少年倶楽部の付録にあった戦艦図鑑を見ている。

——まだ子供だな。

と思いながら、椅子に座り、あのとときの「不信感」に思いを巡らせた。

同じ年の二月九日のことだった。その日、父の定一は、高専の教授たちとの集まりがあるとかで、夕食をすませた後、外出した。

「絶好の機会」と、目で確認しあった二人は、針仕事をしている母と一緒に掘り炬燵にあたってチャンスがうかがっていた。

忙しく手を動かし続ける母は台所に行く気配を示さない。恵一は、秘密の冒険を諦めたのか、木を削ってつくった手製のゼロ戦で遊び始めた。

「お母さん。そんなに根つめて仕事をしないで、お茶でも飲んだら」

潤一が誘いをかけたが、

「うん」

と生返事をしただけで腰をあげようともしない。

柱時計が七時を指そうとしていたとき、母の手が止まった。それに気づいた潤一が、恵一の足を蹴り、顎で合図を送ると、母はもう、船をこいでいた。

「今だ」

二人は、そっと炬燵を抜けだし、忍び足で洋間に忍び込んだ。潤一が白い息を吐きながらラジオのスイッチを入れた。

雪国長岡の二月は寒い。二人がポケットに手を入れ、肩をすくめて待つこと数分、いきなり軍艦マーチが流れてきた。

「やったね。兄さん。ぴったしだ」

足袋も靴下も履いていない二人は、冷たい板床の上で足踏みをしながら耳をそばだてた。

「南太平洋方面帝国陸海軍部隊は、ニューギニア、ソ

ソロモン群島に戦略的根拠を設定中のところ既に概ねこれを完了し、ここに新作戦遂行の基礎を確立せり……」

で始まった発表は、

「掩護部隊としてソロモン諸島のガダルカナル島に作戦中の部隊は昨年八月以降引続き上陸せる優勢なる敵軍を同島の一角に圧迫し激戦戦闘克く敵戦力を撃しつありしがその目的を達成せるに依り二月上旬同島（ガダルカナル）を徹し他に転進せしめられたり」

と続き、戦果と損害を発表して終わった。

いつもの勇ましい調子のものと違い、重苦しい感じがする発表だった。敵人員二万五千、敵飛行機二百三十機撃破という戦果を誇ることもない不思議な感じの発表だった。冒険に成功したにもかかわらず潤一は、言いようのない不満を感じながら炬燵に戻った。

母は、ふたたび手を動かしていた。

「二人してどこに行つてたの？」

「うん。ちよっとね」

千恵は、明治の女だ。男子には母親が口を挟むべきでない秘密があることを知っている。それ以上、詮索

しようとしなかった。

恵一が、ふたたびゼロ戦で遊び始めた。それを見ながら潤一は、先ほど感じた不満のことを考えた。

潤一は、物ごとを論理的に考えるのを得意としていた。まず発表の要点を整理することから始めた。

——作戦の目的は、ニューギニア、ソロモン群島に戦略的根拠を設定することだ。その目的は、おおむね完了した。目的を達成するために派遣した掩護部隊は、敵を追っ払いつつあったが、目的を達成したので転出させられた、というのが発表の骨子だ。……作戦の目的である「戦略的根拠設定」は、「概ね完了」なのに「新作戦遂行の基礎を確立」と言っている、「概ね」完了ということは、「完全」には完了していないということだ。なのに「基礎を確立」と言っている。矛盾している。……言わんとしている骨子は「根拠設定の基礎しかできていないのに、敵を追い払いつつある掩護部隊を転出させた」だ。??? どうもおかしい。戦略的根拠設定に失敗したのを隠すための欺瞞のように思える。

「フフフ」

潤一が二月以来待ち続けている「不信感」に思いを巡らせていると、含み笑いが聞こえてきた。見ると、腹ばいになっていた恵一が、こんどは仰向けになって少年倶楽部の漫画を読んでいる。

「恵一、そんな格好で読んでいると、目が悪くなるよ。海軍軍人には、目が一番大事なのはおまえも知ってるだろう。ちゃんと椅子に座って読みなさい」

恵一がめんどくさそうに立ち上がり、自分の椅子に座った。

——そうだ、あのとき、おれは、掩護部隊がガダルカナルから転出という発表を聞いて、「軍が失敗を隠している」と思ったんだ。その後、大本営発表は、北ソロモン諸島辺りの海戦のものになり、近頃は、その北にあるニューギニア方面のものになってきた。あれ以来、日本軍は、南からじりじりと追いつけられている。やつぱり、あの大本営発表は撤退を隠すための方便だったんだ。……そういえば、今日のにも変なところがある。

五十六さんは四月に戦死しているのに、発表は、今日、五月二十一日だ。海軍は五十六さんの戦死を一カ月も国民に知らせなかった。おかしい。今度も何かを隠しているに違いない。こんなことを海軍が隠すようでは戦争の行方が心配だ。

山本五十六は、明治五年に創立された洋学校を前身とする長岡中学が誇る英雄だ。

連戦連勝が報じられていた聯合艦隊の長官戦死のニュースに、翌日の中学は、教えるほうも上の空、教えられるほうも上の空だった。全校あげて茫然自失という状態で一時間目が始まり、同じ状態が二時間目、三時間目、四時間目と続き、昼休みになった。

潤一と十郎は、申し合わせたように、栖吉川の土手で落ち合い、無言で弁当を食べた。口を開くと五十六戦死の話になるのは分かっていた。二人は、ともに戦争の行方に、言いようのない不安を感じていた。五十六戦死の話を始めると「これで日本は戦争に負けるんじゃないか」という話になるのが怖かった。

弁当を食べ終わっても二人は無口だった。空になった弁当を風呂敷で包み終った十郎がそれを指先でつまみ、ぶらぶらさせている。ゆらゆら揺れる包みを目で追っていた潤一が、思い切ったように口を開いた。同時に、十郎も口を開いた。土手の上で、「おい」が、ぶつかったが、いつものように、十郎が潤一に言葉を譲った。

「参ったな、十郎」

「うん、参った」

「まるで、河井継之助と同じだ」

「おまえもそう思っていたのか。おれもだ」

幕末、越後の諸藩がつぎつぎと西軍（新政府軍、官軍）に恭順していく中、長岡藩の家老河井継之助は、最新式の西洋式軍備を整え武装中立を図ったが、西軍との交渉につまずき、藩兵を率いて立ち上がり、長岡を焦土にし、戦死してしまった。二人は、アメリカとの交渉につまずき、立ち上がった日本と、長岡藩を重ね合わせ、家老の河井継之助の死と、聯合艦隊長官山本五十六の死を重ね合わせていた。

「不吉だな」

「不吉だ」

「十郎、もつと不吉なことがある。日本海海戦のとき、旗艦三笠の司令塔に立ち、敵の砲弾に身をさらしながら聯合艦隊を指令していた東郷（平八郎）元帥は、かすり傷一つ負わなかった。なのに五十六さんは戦死だ。日本は日露戦争に勝った。となると大東亜戦争は負けということになる」

「おれも、嫌なことがあるんだ。家の近所に、自称海軍通のオッサンがいてな。昨日の夜、親父と酒を飲んでいたそいつが、『山本大将の後、聯合艦隊の指揮をとれるのは、山口多聞ぐらいのものだったんだが、ミッドウェーで空母飛龍と運命を共にしてしまった。こんど長官になる古賀なんてのは、山本大将の半分ほどの器量もない。帝国海軍はもうだめだ』って、小声で言っているのを耳にしたんだ」

「これは、おまえにも言ったことはないんだけどな。真珠湾で日本中が沸き返っていた頃、父が、『真珠湾なんか、剣道の試合で、相手が立ち上がる前に、相手の

面を打つたみたいなんだ。成功してあたり前さ。問題はこれからだよ。戦争が長引けば日本は負ける』って、ぼそつと言ったことがあったんだ」

潤一の父定一は、工学博士の資格をとった後、ドイツに二年ほど留学したことがあった。二年間でドイツの合理主義を身につけこそしたが、その頃の日本に多くいた、ドイツかぶれにはならず、むしろドイツ国内で芽生えていた覇権主義を嫌った。暇をみてはヨーロッパ中を歩き回り、アングロサクソンの自由主義に惹かれるようになっていた定一は、日本への帰路、船でニューヨークに渡りアメリカを横断し、アメリカの国力をつぶさに見ていたのだ。

「だけど、おまえの父さんは、子供が軍人の道を選ぶのには反対しなかつたじゃないか」

「国を挙げて戦争をしているのに、手をこまねいて見ているのがいやだと見え、『侍の子は侍になれ』って、励ましているぐらいだ」

「ふうん。偉いな。……戦争は、もう一年半も続いているぜ。これから日本は落ち目になるのかな。参っ

たな」

「参った」

二人は、ふたたび口をつぐみ栖吉川の川面を見つめていた。

無言の時間が流れた。

——そろそろ教室に戻る時間だな。

と、潤一が思っていると、

「今朝の新聞を見たか？」

十郎が思いだしたように、ポケットから小さく折りたたんだ新聞を取り出した。

「ああ、隅から隅まで読んだ。大本営発表がそのまま書いてあるだけだ。あれじゃ、どこで、どうやって死んだのか、よく分からない。遺骨は、『武蔵』に乗せられ、昨日の午後、木更津沖に着いたぐらいが目新しいことだ」

「情報局が、大勲位、功一級、正三位、元帥の称号、そして、国葬を賜ると発表している」

「遺骨は、国葬までの間、芝白金にある東京水交社の

日本間に安置され、一般の焼香は二十四日からも書いてあった」

「東条（英機）、首相、陸軍大臣）さんとか、近衛（文麿）さんの談話がのっているぜ。おい、みろよ、永野（修身）、米内（光政）、吉田（善吾）、嶋田（繁太郎）、歴代海軍大臣のものもあるぜ。しかし、陸軍のは東条さんのしかない」

「五十六さんが陸軍嫌いだったのは有名だからな。新聞記者がそのあたりを配慮したんだろ。どっちにしろ、みんな通り一遍のことを言っているだけだ。『長官の死を無駄にせず、八紘一字の実現に向かって戦い抜こう』とか、『一億、火の玉になって仇を討とう』とかさ。いい大人が、もう少しましなことが言えないもんかね」

「しかし、米内さんの談話は変わっているぜ」

「ああ、『五十六さんの夢を見た』っていう談話だろ。あの人がらいだな。正直な感想をもらしたのはい」

「気づいたのは話の内容が変わっているだけか。頭がいい潤一らしくないな。よく読むと、何か秘密めいた談話だぜ」

「秘密めいた？」

「ああ。もう一度読んでみてくれ。ここにある」

『不思議だと思ふのは四月に実にはつきりした夢を見た、何を言ったか忘れたが、今でも顔がはつきりする夢を見た、をかしいなと思つてゐるが、まさかかうなるとは思はなかつた』。

「これがどうだって言うんだ。どうってことはないじゃないか。米内さんといえは、五十六さんが尊敬する数少ない海兵の先輩だ。海軍次官だった五十六さんと、井上成美軍務局長とともに、断固として日独伊三国同盟に反対した海軍大臣だった人だ。米内さんには『剣難の相があるから』と、五十六さんを自分の後任の海軍大臣に指名せずに聯合艦隊長官として安全な海に送り出したという噂もある。その人の夢に五十六さんがでてきたって不思議はないじゃないか」

「夢にてでくるのには不思議はない。しかし、よく読んでみる。米内さんは、『実にはつきりした夢を見た』

って言ったのと裏腹に、『何を言ったか忘れたが』って言葉を濁しているんだぜ。おかしいじゃないか」

「なるほどな、言われてみれば変だ。言葉に整合性がないな。こんな言葉の綾に気づくおまえって、やっぱり軍人向きではなくって文人向きだ」

「変な誉め方をするなよ。とにかく何か変だろ。米内さんは何か隠しているぜ」

「隠している？ 何を隠しているって言うんだ？」

「真珠湾奇襲のような途方もない大作戦、例えば、機動部隊をアメリカの西海岸へ送り込んで、一気にアメリカを攻略する、というような大作戦を伝えたんじゃないかな」

「軍の極秘事項だから言葉を濁したという訳か。それだったら、もともと、『何を言ったか忘れたが』なんていう、思わせぶりなことを言わなきゃすむことだ」

「そうだな。五十六さんが極秘事項を話したんだつたら、『言ったことを忘れた』なんて言うことはないな。考えれば考えるほど、不思議さが増す。いったい、五十六さんは、米内さんに何を言ったんだろう？ おれ

には秘密の匂いがプンプンするんだけどな」

「夢にでてきた人の顔かたちだけを覚えていてことは、よくあることだ。おれには、秘密の匂いはしないね。それより、おれが気になっているのは発表の遅れだ。四月に戦死したというのに、大本営発表は五月二十一日だ。一カ月も国民に知らせなかったんだ。胡散臭いだろう？ こっちこそ秘密の匂いがプンプンだ」

第一章 オーストラリア ゴールド・コースト

平成十七年十一月、朝六時過ぎ、大下文太は、ゴールド・コーストの北外れ、アランデルにある自宅を、ブリスベン国際空港に向けてフォードのフェアモントで発った。「オーストラリアは時差がなくて良い」と、毎年、三週間の滞在型休暇に来る末姉の道子とその夫、江藤潤一、そして、潤一の幼友達、徳田十郎を出迎えるためだ。

パシフィック・ハイウェイ、ゲートウェイと高速を乗り継ぎ、ブリスベン川にかかる背の高い有料の橋ゲートウェイ・ブリッジを超えると、道は長い下り坂になり、左手に、ダウン・タウンのビル群、右手にブリスベン国際空港が見えてきた。ダッシュボードの時計

は七時五分を表示している。成田からの便の到着予定時間は七時十五分だ。

——家を出るのが遅くなってしまったが、急げば、なんとか間に合いそうだ。

日本—オーストラリア間の便は南北の移動のため、日本—アメリカ間のように偏西風に影響されることがない。年間を通して飛行時間の変動が少なく、予定到着時間より早く着くことも多い。

昨夜、文太はそれを考慮して早めに目覚ましをセットしてベッドに入ったが、「潤一さんに、どうやってプア・ニューギニアでの一件を伝えようか」と考えているうちに、寝るタイミングを逃してしまった。おかげで、今朝、目覚ましを止めてから、二十分ほど、うとうとしてしまった。

アクセルを踏みこみ、スピードメーターの針が制限速度の百キロを二十キロほど超えたところを指したとき、バックミラーが後ろから猛烈なスピードで近づいてくる箱型のライトを上に乗せた白い車をとらえた。急いでアクセルから足を離し、軽くブレーキを踏み、

百キロに戻した文太に、あつという間に追いつき、いつきに追い抜いて行ったのはタクシーだった。

——なんだ、パトカーじゃねえのか。紛らわしい格好をしゃがんで、人騒がせなタクシーだ。このまえのトラブル以来、パトカー過敏症になってしまったようだ。

文太は、自分の過剰反応に苦笑しながら空港へ向かって高速を降りた。

空港に着き、空港ビルの前に設けられた青空駐車場に車を止め、エスカレーターで二階の到着ロビーに上がった。

ブリスベン国際空港の朝は早い。シンガポール、クアラルンプール、バンコック、バリ、フィジー、グアム、マニラ、香港、台北、ソウル、東京、大阪、名古屋、福岡などからの便が朝まだ暗いうちから、次々と到着するのは、七十キロほど南にあるオーストラリア最大のリゾート、ゴールド・コーストを訪れる観光客が、「到着したその日から、一日も無駄にせず物見遊

山ができるように」という配慮があるからだと言われている。

ロビーは、ヨーロッパからと思しき分厚いコートを手にしたカップル、シヨート・パンツにサンダルという出で立ちのバリかフィジーからの戻り客と思しき若者、荷物を山のように抱えた東南アジアからの家族連れなどで、ごった返しているが、「○○様」、「××ツアー」などと日本語で書かれたサイン・ボードを持ったツアー・コンダクター達は三々五々、お喋りにかまけている。

——間にあつたようだ。

到着ロビーの左手にある電光板を見あげると、それを待っていたかのように、「オン・タイム」のデジタル表示が、カチャツと、「到着」に変わった。

ほっとした文太は、にわかに空腹を感じた。朝食を食べずに家を飛びだしたのだ。

——今日は、いつもより荷物検査が厳しいはずだ。まだドーナツを食べるぐらいの時間はあるだろう。

他の大陸と際立って異なった動植物相を持つオース

トラリアでは、つい最近まで到着便の機内で殺虫剤をスプレーしていたぐらい、水際での防疫が徹底している。くわえて、このところ口蹄疫、BSE、SARS、チキン・フルーと家畜・家禽の疫病続きた。空港での小荷物検査が厳しさを増しているのは、容易に想像できた。

文太は、到着ロビーの一角にあるコーヒー・ショップで、アメリカン・コーヒーとドーナツを買い求め、入国審査場の出口を望むことができるテーブルに席を取った。

——朝の一杯は、やっぱり、アメリカンに限る。

文太は、オーストラリアに移住して十五年になるが、その前の十年を過ごしたアメリカが、いまだに好きだ。正確に言うと、世界はアメリカを中心に回っていると勘違いしている尊大なアメリカ人は嫌いだ、文化が好きだ。スポーツで言えば、アメリカン・フットボール。音楽で言えば、ジャズ。食べ物で言えば、ホットドッグ。コーヒーで言えば、一日に何杯飲んでも胃にもたれることがない番茶みたいなこのアメリカン・コ

ーヒーが好きだ。アメリカでの文太の一日は、通勤途上にあつたコンビニで買い求める朝の一杯が始まり、夕方遅く帰路につくまでに飲む量は、マグカップで十杯を下ることはなかった。カプチーノとか、カフェ・ラテといったイタリアン・コーヒーが好まれるオーストラリアで、アメリカンが飲めるのはマクドナルドの他には、ここぐらいしかない。文太は、空港付近に用があるときには、かならずここに立ち寄ることになっている。

文太がコーヒーを飲み終わるのを待っていたかのよう、ツアー・コンダクター達がお喋りを止め、それぞれの持ち場についた。JALのクルーが出口から現れたのだ。

——なるほど、あれが合図なのか。

文太が席を立ち、出迎えの人の波に加わって数分、小さなバッグを一つ手にしただけの男性客が足早にでてきたのに続き、ドブネズミ・ルックのビジネスマン・グループ、サーフィン・ボードを抱えた茶髪の若

者、帽子にバック・バック姿の熟年カップル、真新しいスーツケースを引いたペアー・ルツクの新婚カップル、「私達は旅慣れているのよ」と言わんばかりの態度の熟年女性グループなど、一目で日本人とわかる旅行者がひとしきり続いた後、赤いバック・バックを背にした道子が姿を現した。潤一は、徳田さんと思しき人と二人でカートを押しながら、その後に従っている。二人の背格好は、細身で長身。よく似ている。違いといえば、黒っぽいブルゾンにジーパン姿の十郎が白髪 of 総髪で、紺のブレザー、グレーのズボン姿の潤一がごま塩を七三に分けていることぐらいだ。

「いらつしやい。夜行は疲れるでしょう?」

文太が道子に声をかけた。

「お出迎えありがとう。旅行シーズンが外れているので、飛行機はガラガラでした。ゆっくり休めました」

と言った道子の顔に疲労の色が見える。

——姉さんも来年は古希だ。長旅の疲れが顔に出るようになった。

「そう。それはよかった」

——でも疲れが顔にでているよ。

を、飲み込み、文太は潤一に向かって手を差し出した。

「潤一さん。今年もようこそ」

「お世話になるばかりですまないけど、今年もきました」

握手を交わした潤一が文太に十郎を紹介した。

「文太くん。さつそくですけど徳田十郎さんを紹介する。メールで伝えたように、私の幼馴染だ。十郎は忙しいので、一週間ほどいるだけだ」

「十郎、これが、道子の弟、大下文太くん」

「文太です。宜しくおねがいたします」

頭を下げながら、文太が手を差しだすと、十郎は戸惑いを顔に浮かべながら、その手を握った。握手に慣れていないのだ。

「徳田十郎です。お世話になります」

「十郎と私はね、同級生から『ピンキリ徳利』って呼ばれたほど、いつも二人でつるんでいたんだ」

「ピンキリ徳利?」